

対談

川を楽しむ徳島のライフスタイルを全国が注目!

NPO法人新町川を守る会
理事長

✦ 中村英雄

徳島経済研究所
顧問（前専務理事）

✧ 田村耕一

新町川を守る会誕生のきっかけ

田村：20年前に初めて徳島に来た時に新町川を守る会(以下、守る会)を知って会員になりました。中村さんをはじめ、守る会のメンバーの方といろいろふれあったことが徳島を好きになった理由の一つなんですよ。清掃はもちろんですが、川を生かした楽しいことをどんどんやっておられて、それ以来ずっとお世話になっています。みなさんの活動のおかげで、20年前にはもう新町川はけっこうきれいでしたね。

中村：その頃にはある程度きれいになっていました。

田村：昔は新町川が本当に汚くて、きれいにしなくちゃいかんと中村さんが立ち上がられたと聞いていますが、その頃の様子と、始めようと思われたきっかけをお話いただけますか。

中村：1987年に、徳島市の観光課から、阿波踊り期間中の昼間のイベントを何かしてほしいという話がありました。

田村：なぜ靴屋さんの中村さんに話があったん



左から中村理事長、田村



清掃活動を始めた頃の新町川

ですか。

中村：東新町商店街の事業部長をしていたんです。それで、ドラム缶を4つ組んでイカダレースをしたんです。たくさん応募がありました。イカダレースは満潮でないとできないんですが、スタートの時に写真を撮ったら、イカダでなくゴミしか写らないというくらいゴミが上がってきたんです。それを見て、こんな汚いのはだめだと感じました。私自身は、徳島そごうが出店するちょっと前から、川の掃除をしていたんですよ。

田村：お一人で、ですか。

中村：いえ、商店街連盟で。新町川は1960年代はすごく汚かったんですよ。

田村：全国的にも公害が問題になっていた時期ですね。

中村：当時は、新町橋でも阿波踊りの時季には消臭剤をまいていたんですよ。ヘドロがいっぱい汚くて。

田村：子どもさんが描いた新町川の絵が真っ黒だったとか。

中村：1980年だったかな。徳島青年会議所が写生大会をした時に真っ黒な新町川の絵があったんですよ。それで徳島青年会議所が立ち上がったのがきっかけだと思います。川の中に自転車が百台以上あったんじゃないかな。ひどかったですよ。

田村：そんなに沈んでいたんですか。

中村：最初はそれくらいあったと思います。1992年の3月に守る会ができて、その活動を引き継いでやっています。



網で一つ一つすくっていきます

田村：中村さんは初めからずっと理事長ですね。

中村：ええ。最初は10人で始めて、毎月1日と第3土曜日に川掃除をしたんです。

田村：もう27年ですか。

中村：その間で休んだのは1、2回ですね。どんなに雨が降ってもやりましたから。

大阪などは機械でゴミを取っていて速いんですよ。われわれは網でゴミをすくっているのですが、市民が見て「あいつら取るなら捨てんようにしよう」という気持ちが育っていけばいいと思ってやっています。掃除をしている時でも、橋の上からゴミを捨てる人があるんですよ。

田村：掃除しているのを見てても、ですか。

中村：でも、怒ったらいかんぞと言うんです。怒ると、「頼んでない」と言われるので、黙って拾っていこうと。

田村：その活動が軌道に乗ってきたと感じたのは、いつ頃ですか。

中村：3年くらいすると、県や徳島市へいろいろと言ってくれる市民が出てきて、それで県の河川課が力を入れてくれるようになったんですよ。

田村：川掃除をする人は3年で増えましたか。

中村：50人くらいにはなっていたと思います。

田村：守る会の個人会員や法人会員というシステムはその頃からできていたんですか。

中村：最初から3千円の会費をもらっていました。今も個人会員は3千円です。法人会員は今は3万円ですが、最初はなかったんですよ。



NPO法人新町川を守る会 中村理事長

10年続けると大きく変わってきました。昔から、石の上にも三年と言うから、「川の上には10年」とおもしろく言っています。3年たった頃に、行政によって青石で護岸がきれいになりました。

田村：靴店の経営がご本業ですが、守る会を作ってから守る会の活動に専念されていますね。

中村：商店街の事業部長もやめていて、ほとんどかかりっきりでしたね。

田村：ご商売を守っておられる奥様の貢献度もすごいですね。

中村：私が外へ飛び出してしまったので、あとの者は大変だったと思います。



新町川での結婚式

周遊船運航へ

田村：水際公園での最初のイベントはどんなものでしたか。

中村：1989年8月に徳島市の市制百年を記念して水際公園が出来たんですよ。その年の9月頃に、新町川ラブリバーフェスティバルのイベントとして、ふれあい橋の上で結婚式をしました。

田村：話題性がありますね。

中村：郷土文化会館からふれあい橋の近くまで、新郎新婦を大きい台船に乗せてくるんです。当日は雨でしたが、結婚式の間

だけ雨が上がりました。今まで川での結婚式は3組くらいやりました。

ここではいろんなイベントをしたんですよ。バンドを呼んだり、第九の演奏、魚釣り大会もしていましたね。イベントは今もやっているものがほとんどで、「川からサンタがやってくる」も続いていますし、雅楽の演奏会も1989年からしていますから。

田村：早くからやっていたんですね。

中村：阿波雅楽会の初演はふれあい橋の上でした。それからずっと観月雅楽演奏会をしています。

田村：まだ今のようないょうたん島遊覧船はなかったんですね。

中村：遊覧船は1992年に徳島市がひょうたん島PR船ということで電動の船1隻で始めたん



阿波雅楽会による観月雅楽演奏会



クリスマスの風物詩「川からサンタがやってくる」

です。1年で百人くらい乗ったかな。今の船になったのが1995年です。

田村：今は4隻ありますね。

中村：徳島市、阿波銀行、港産業が1隻ずつ。あとはライオンズクラブなどです。

田村：最近は年間何人くらい乗られていますか。

中村：去年は、約6万人乗っているんですよ。

田村：県外の方はどれくらいですか。

中村：だいたい徳島市内が3割、市外が3割、県外が3割、あとの1割が海外からですね。

田村：県外と海外を合わせると約4割ですか。

中村：天気の良い日は県外の人が多いですね。お客さんが乗りたいと言えば雨が降っても船を出します。休むのは警報が出た時だけです。

今日もあいにくの天気ですが、県外の人10人、外国の人が3人、全部で57人。昨日は370人くらいで今月は6千人から7千人くらいになると思います。

田村：定期運航は1日何回ですか。

中村：40分毎ですが、たくさん集まればその都度出ます。

田村：最初はまったくの無料でしたね。

中村：そうです。毎月第2、第4日曜日で、回数が少なく乗る人も少なかったのが無料でもやっていけたんです。その後は保険料として大人100円、5年前にこの台船ができた時に200円になったんですよ。子どもは100



日中は、SUPに乗ってサンタがやってきました

円です。

+ **×** **+** **×**

活動資金について

田村：いろんなイベントに必要なお金についてお聞きしたいと思います。多いのはやはり助成金ですか。

中村：1989年に始めた時は、ラブリバーフェスティバル実行委員会と守る会に、県や市からお金が出ていました。5年くらいでなくなって、その都度寄付を集めて、イベントはずっとやっているんですよ。

遊覧船には市が年間300万円出してくれています。1隻で一日5回運航、1回につき6千円で一日3万円という計算なんですよ。今4隻で一日百回出しても一日3万円はかわらず同じです(笑)。

田村：それ以外の収入源は会費ですか。



ひょうたん島クルーズ

中村：ええ。今は法人会員も40あります。

田村：個人会員は何名ですか。

中村：約260人です。

前は河川管理財団がたくさんあって補助金もいただいたんですが。今は、子どもゆめ基金(独立行政法人 国立青少年教育振興機構)などから出ています。もちろん企業からも寄付金をいただいています。

田村：収益事業がないので、自分で稼いでそれを元手にするというのはなかなか難しいですね。

中村：そのかわり、一般からもわりとたくさん寄付が集まっています。花植えの費用も年間に約400万円かかるんですが、だいたい集まっています。

田村：助成金や寄付金で全体を運営しているという状況ですか。

中村：ええ。こういう活動をずっと続けていると、それを見ていて寄付をしてくれます。

吉野川フェスティバルはお金のかかるイベントで、みなさんからの寄付で1,000万円くらい集まります。1989年に市が始めた時は1億円かかっていました。補助金がどんどん減ってきて、去年は百何万円です。でも、当時よりはるかに多くの人が集まっています。われわれは環境を良くしようという目的でやっているの、みなさんが無料で出演してくれて、おかげで大きなイベントになっています。今年は市が、花火の補助金を300万円から600万円に増額してくれましたから、大きな花火ができると思います。

田村：遊覧船は4隻がフル回転ですが、運転す

る方がまったくのボランティアなんですね。

中村：会員の中の20人くらいがやってくれています。

ただ、これからはひょうたん島だけというわけにはいかないんですね。鳴門へ行く撫養航路、それから新町川だけでなく、吉野川の魅力も発信していきたい。4月にできるイオンモールへ行く船も出します。人手がいるようになれば、ある程度お金も出さないとまわっていかなくなっていると思います。

田村：撫養航路は、乗ったら楽しかったですね。船で川沿いに鳴門まで行けるとというのはびっくりでした。これから事業が広がればお金もかかってくると思いますが、それについてはどうお考えですか。

中村：ガソリン価格の変動などにもよりますが、保険料も含めて300円にできたらずいぶん違うんですが。

田村：それは値上げしてもみなさん納得されるんじゃないでしょうか。NPO法人なので事業に使うための収益は上げておかまわないんですよ。

中村：ある程度仕事として収益も上げて、人が働ける場所を作ることも必要だなと思っています。

次は海の駅を作りたいんですよ。

田村：海の駅とはどういうものですか。

中村：今世界からヨットがたくさん来ているんですよ。それに対しての受け入れが不十分なんです。この前もオーストラリアの船が来てたんですが、徳島からいろんなところへ回っていく



吉野川フェスティバル 夜の会場の様子



吉野川フェスティバル 日中のイベント



撫養航路



んです。年に何度も来るんですよ。その人たちをマリンピアで受け入れるようにしたらどうかと思うんです。

田村：インバウンドのヨットがたくさん停泊できるような海の駅を作るといえることですか。

中村：外国からだけでなく、日本国内からも船が来るけれど泊めるところがないんです。マリンピアのところに高速道路ができるでしょう。そこへ海の駅を作って発信すればたくさんの人が来ると思うんです。鳴門市にあるきたなだ海の駅は物を売るところなんです。そうではなくて、駅という以上、単なる船着き場でなくて人がいて話ができる、交流の場所を作りたいんです。

田村：ずっとボランティアに頼っているだけでは事業の発展が難しいので、ある程度人も雇用して、収益も上げて、それをまた事業に注ぎ込んでいくという循環がうまくできていくといいですね。

中村：そうでないと発展しないですね。吉野川へ行く船や屋形船は貸し切りだけでやっているんですよ。たとえば、貸し切りは1万円で、運転する人には5千円出しましょうというかたちで、運転する人もやっていけるようにしたいと考えています。こんな船でも貸し切りの要望はけっこうあるんですよ。

田村：他地域のこういう遊覧船はもっと料金を取りますから、そういうことももっと取り入れてもいいと思いますね。

中村：この船も、観光目的で使う方が水がきれいになるんですよ。水がきれいになると環境が良

くなる。地域づくりも環境がいちばんですから。

田村：お金を取るとなると、ガイドの内容もいろいろ工夫をしていかざるを得ないでしょうし。

中村：そうなるでしょうね。段階的に進めて、近いうちにできると思います。

+

×

+

×

住む人が楽しい街に

中村：海の駅もやりたいですが、基本的には住んでいる人が楽しい街を作りたいと思っているんですよ。そうすると自然と人が集まってきてちょっとずつ広がっていく。ですから、川だけでなく、道路もきれいにしているんです。

田村：2016年12月には、これまでの花植え活動が評価され、国土交通省から「道路協力団体」に指定されましたが、徳島市内が花ですごくきれいになったという印象があります。

中村：特に今の時期はチューリップが咲いてきれいですよ。

田村：藍場浜もそうですし、街中の歩道もそうですね。花植えのボランティアは外国の人もたくさん見かけますが、どういう方たちですか。



屋形船

中村：国際ボランティア活動をしているNICEというNGOから来ています。3年くらい前から、全部で11か国くらい。今はトルコとドイツで、今月中旬にはフランスから2人来ます。

田村：その人たちの費用はNICEから出るんですか。

中村：出ないんですよ(笑)。宿泊はNPO法人のびざん大学が、朝と昼の食事は守る会がお世話しています。

田村：海外でボランティアをしようという人は世界中にたくさんいるんですね。

中村：みなさんよくやってくれますよ。よくパーティーもしますが、楽しんで参加していますよ。

＋ × ＋ ×

川がつなぐ他地域との連携

田村：海の駅の話が出ましたが、他にお考えになっていることはありますか。

中村：吉野川交流推進会議で、吉野川をまるごと博物館にしたいというのがあるんですよ。

田村：中村さんは私とともに推進会議の副会長ですね。

中村：ええ。吉野川全体を博物館に見立てて、館長がいて、それぞれの街に学芸員がいるというわけです。

池田へ行けば誰かが案内してくれる。高知の早明浦へ行けば吉野川の上流を案内して話してくれる。石井なら藍の話をしてくれる人がいる。そうすると吉野川というもので連携ができてくるんですよ。

そういう人と連携して吉野川をもっと盛り上げていきたいですね。吉野川交流推進会議が活動しているけれど、徳島の人しか入っていない。だから、上流といえば池田だと思っている。池田はまだ中流なんですよ。

高知、愛媛、香川も入って一緒に活動をしていきたい。それをつなぐためのまるごと博物館も2年くらいかかるかなと思っています。筑後川は「筑後川まるごと博物館」をもうすでにやっているんですよ。

田村：それは観光にもつながりますね。

中村：そうなんですよ。こういう川の活動をしているところは全国でつながりができるでしょう。私も北海道から九州までだいたい行きました。

でも、四国は一つずつで、一つではないんですよ。香川用水の40周年記念式典に行きましたが、徳島県からは誰も行ってないんです。吉野川の水を取られているという意識があるんでしょう。そのあたりは変わっていかないとだめだと思います。

こういう活動をしていたら、相手をよくするという気持ちが大事なんです。企業も海外へ出ていくときに、賃金が安いからでなく、相手の国をよくしようと思って行けば、すぐには得をしないかもしれないけれど、将来的にはすごく得をするんです。

川のイベントをしても、今すぐでなく十年後によくなるという気持ちでやっていくのがいいんです。吉野川交流推進会議でも、四国を一つにして、四国の人みんなでもっと盛り上げてい



海外からのボランティアのみなさん

きませんかと提案しました。

高知の早明浦ダムの上流や大川村にもよく行くんですよ。大川村の村長もここへよく来てくれます。1975年に早明浦ダムができて、上流はすごく過疎化してるんですよ。でも、ダムができて洪水がなくなって、われわれはその恩恵を受けているんだから、今度はむこうをよくしていくという気持ちですね。結果としてまた自分もよくなるんですよ。

＋ × ＋ ×

川とイベントとの魅力的なコラボ

田村：行政も、守る会の活動に関しては協力的ですね。

中村：すごく協力的ですね。よく応援してくれます。

田村：まず民間でやれることをやっていたのを見て、行政も応援してくれるといういい循環が生まれているんですね。

中村：住民参加だけでなく行政参加でないとダメなんです。住民が本当にやっていたら行政は応援してくれるんですよ。企業も応援してくれます。それには住民の支持がないと難しい。住民が支持してくれたらものすごく変わってきますよ。川掃除をずっと続けてきれいになると、建物がだんだん川の方へ向いてくるんです。守る会以外のイベントもたくさん行われるようになりましたね。

田村：そうですね。

中村：徳島LEDアートフェスティバルに、アニメのイベントのマチ★アソビ、とくしまマルシェもそうですね。

田村：川がきれいだったのが、徳島LEDアートフェスティバルやとくしまマルシェを研究所が提案できたんです。守る会の活動があっけはじめて、われわれの提案も生かすことができました。

中村：この川を生かしていけば、全国どこにもない特徴のある街ができていくんですよ。

この川への台船の設置も、普通はなかなか許



徳島LEDアートフェスティバル2016



とくしまマルシェ

可をもらえないんですよ。民間では全国でもここだけです。そういうところでも行政がすごく応援してくれてますね。徳島市は市長が替わってもキャッチフレーズから「川」は外してないですね。

田村：たしかにそうですね。「水都とくしま」というフレーズは必ず入りますからね。

最近、われわれの提案にも賛同していただいて、藍染めのものを身につけて参加する藍パーティーや、川とのつながりで藍を盛り上げるような活動にもご協力いただきありがとうございます。

中村：このあたりは実際に藍倉があったところなので、「藍 LOVE 新町川」を開催して藍を広められるというのは本当にいいことなんですよ。

県が藍場浜に藍を植えるというので、5月に私たちで植えます。藍の花自体はそんなにきれいな花ではないですが、ここに藍倉があったか



藍 LOVE 新町川

ら藍場浜という地名になり、藍によって徳島が栄えたんだということを書いた看板を作って、これがその藍ですよと見せたいんですよ。そういうこともしていかなないと、ファッションなどだけでは底辺が広がらない。藍の文化、教育的なことも知ってもらってすそ野を広げていこうと思っています。

田村：藍については徳島経済同友会でもいろんな提案をしているので、いろいろ連携して盛り上げていきたいですね。

中村：遊覧船乗り場のテントの一部を新しいものに替えようと思っているんです。本当は藍染めのテントにしたいんですが、材質や強度の関係でできないんですよ。

田村：今日もおしゃれな藍染めのジャケットとシャツですね。

中村：できるだけ着て出かけています。県庁の人も藍染めをよく着ていますね。常に身近にあるようにしたいんです。普段これを着て船に乗っていると、みんなに聞かれるんですよ。そういう時にも「これは藍染めですよ」と言えますから。



藍場浜公園に藍を植えました(5月)

+

×

+

×

花で街をきれいに！

田村：「とくしまちなか花ロードプロジェクト」で、ここ1年くらいで街中がきれいになってきた気がしますが、きっかけは何ですか。

中村：ツツジの花の剪定は、川への取り組みを始めた頃からしていたんです。10年くらい前から花もちょこちょこ植えていました。本格的に始めたのは3年くらい前ですね。

住んでいる人が楽しい街は、観光客も楽しいですね。花があるだけでなく、タバコの吸い殻のない街にしないとだめですね。花植えを始めてから、タバコの吸い殻を掃除する人も増えて、いろんな人が掃除しています。活動範囲ももっと広げて、県下全域でやりたいんですよ。

田村：身体がいくつあっても足りないですね。ボランティアの人ももっと増えないといけません。

中村：そうです。花を植えたら、水やりを毎日しないといけないんですよ。でも、周辺で花にやる水をくれるところが増えました。われわれがしているからみんなが応援してくれるんですよ。行政では、水くれと言ってもとてもとても。大きなタンクに何杯もの水を何時間もかかってやります。花に水やっていたら、ありがとうございますと言って、飲み物を差し入れてくれたりします。

田村：夏の暑い時期も、朝の早い時間から水やりをしてらっしゃる姿に頭が下がります。

中村：夏は朝5時くらいからと夕方は18時から。市民がすることによって地域づくりになる



大きく育っています(7月)

んですよ。それがずっと続いてくると、文化になるのかな。川や道路を掃除するのが徳島の文化になるには、30年、50年とかかるでしょうね。

田村：「川も人と同じで、見られたら美しくなる」とよくおっしゃってますね。

中村：みんなが見てくれないときれいにはなりませんね。国土交通省の河川協力団体は、われわれが日本の第1号なんですよ。道路協力団体も第1号。

田村：それ以外にも、ふるさとづくり大賞(平成27年度)の団体表彰とか、いろんな賞を受賞してらっしゃいますよね。

中村：たくさんいただいております。先日は緑綬褒状をいただいて、天皇陛下のところまで行ってきました。

田村：守る会の活動は、強制ではなくて、やれる範囲で、やれることからやっていくというスタンスですね。

中村：できる人ができる時にできることを、という気持ちでやっています。それでも、月2回の掃除の時は何も言わなくても集まってきてくれていますね。

徳島市役所の新人研修で毎年川掃除に来るんです。県からは毎年9月頃にボランティア体験の人たちも来ているので、元町の道路の掃除をしてもらっています。今年の3月には、道路の掃除をしてみると言っ自分たちで参加してきた人が10人ほどいました。

徳島はタバコの吸い殻が多いところなんですよ。東京なんかは条例でやっていますが、罰金

とかそういうことでなく、捨てたらいけないと自主的に感じる県にしたいんです。そのためにはわれわれがずっと拾っていくんです。私もだいたい一日百個は拾ってますよ。

田村：最近企業でも定期的に清掃活動をするところが増えてきていますので、そういう動きが広がっていけばいいですね。

中村：この土曜日の、「とくしままちなか花ロードプロジェクト」の事前の清掃は、120人くらい集まってくれました。花植えのときは最近では300人くらい来てくれます。自分たちで植えていけばゴミを捨てなくなるとか、水をやろうとか、みんなの街に対する意識が変わってきますね。

きれいになってくると、愛着は湧くし誇りも持てるようになります。船に乗ったお客さんを、川がきれいだという誇りを持って案内していますよ。

田村：これまでの活動を通じて、川を楽しむライフスタイルが他の地域に比べて定着していますね。

中村：それについては、徳島は全国の模範のようになっています。すごくたくさんの方が見に来てくれます。この船や掃除の話、花植えに200人が来てくれるという話をすると、みなさんびっくりして、「中村さんの話は参考にならない」と言われます(笑)。

田村：長年かけてそうなってきましたからね。短期間でこの成果は出せないですね。

中村：そういうことですね。最初からの積み重



とくしま花ロードプロジェクト

ねですよ。

田村：行政や企業も寄付を含めていろいろ協力していますが、今後さらに何か要望はありますか。

中村：みんな地域をよくしようと思っているから、われわれが地道に活動していくことによって、いいと思えばみんな応援してくれます。寄付もしてくれます。

田村：やれる人がいろいろやって、それを見てサポートしようという人が増えてくれればいいということですか。

中村：住んでいる人が楽しい街、今すぐでなく何十年後によくなっていくという形で続けていきます。船を出したりイベントをしたりするけれど、それは手段であって目的になったらだめなんですよ。目的は、きれいな街、住みやすい街、ここに住んでよかったと思う街を作っていくことですよ。

＋ × ＋ ×

後継者育成と収益力アップが課題

田村：中村さんの熱意が、守る会を作られた時から全然衰えていなくて、むしろますます意欲的な印象を受けますが、おいくつでしたか。

中村：78歳、9月で79歳です。



吉野川河口を進む遊覧船

田村：そうは見えなくてびっくりですが、後継者についてはどうお考えですか。

中村：よく聞かれますが、こういうことはやはり志というものがなきゃなんです。それがないと続かないんですよ。

田村：そういう志を持つ人はだんだん集まってきていると思いますが。

中村：そうですね。これから30年かけて引き継がないといけません。

田村：30年後は100歳を超えておられますが、まだまだ陣頭指揮ですか(笑)。

中村：後継者をきちんとしないと続いていけないので、最後の仕事ですね。

でも、私と同じことをするのは難しいでしょうね。一日この活動をするというのはできないですよ。遊覧船を出す、掃除もする、吉野川のことをするにしても、常に率先垂範なんです。そうでないとみんなもついてこれないんですよ。自分一人でもやるという気持ちが大事なんですよ。そうするとみんなが来る。初めからみんなですようとすると、結局誰もいなくなる。どんな雨でも私が掃除をするもんですから、みんな雨でも中止とは思ってないんですよ。

田村：会員は積極的に勧誘されていませんが、もっと広く募集したら、個人会員で応援したい

と思っている人はたくさんいると思いますが。

中村：法人会員の企業には請求を送っていますが、個人会員の会費は払いたい人だけが払ったらいいうことにしているんですよ。

田村：個人会員を募集していることを知らない人もいると思うんです。

中村：活動することによって自然に広がっていくんですよ。

田村：個人会員も1,000人くらいいてもいいと思うん

ですが。

中村：それくらいになった時に、川沿いに家を作ろうと思っています。ボランティアの人や、全国の川の会の人々が来た時に、宿泊できるような場所を作っていきたいんですよ。

田村：川の家構想ですね。交流の場にもなりますしね。

中村：それもできるとしています。

田村：海の駅、川の家、それからもう少し収益を上げて事業に投入するような仕組み作りが大事ですね。

中村：そうすることによって、徳島の川の魅力をもっと出せると思っているんです。鳴門へ行く航路も、今は3時間くらいで帰ってきますが、川の魅力を楽しんでもらって、向こうで食事をして帰ってくるということもしていきたい。そ

れから、ひょうたん島アイスを作ろうという話もあります。

やっとそうやって企業化して一般の人を採用してもやっていけるという形が整い始めたかなというところですね。

田村：これからですね。この活動を継続していくためにも、そういう仕組みは作っておいた方がいいですね。寄付と助成金だけに頼っていくだけではなかなか先行き難しいですから。

来年をめどに、われわれの研究所が提案した、徳島市を中心とする東部の行政と経済界が一緒になって観光を推進する新しい組織を作る動きが出てきていますので、そこでのいろんな観光商品作りで、守る会の取り組みと連携して観光也大いに盛り上げていきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

(2017年4月13日 ひょうたん島遊覧船乗り場にて対談)

(対談編集 元木恵子)



水上と水際で多彩な活動を展開

新町川を守る会は、1990年3月に「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう！」と有志10人で会を発足し、毎月2回ボートで川の清掃を始めました。

今では、徳島市のひょうたん島を囲む新町川と助任川の他、田宮川、吉野川の清掃、ひょうたん島周遊船の運航、花植え、植樹活動など、年間を通しての多彩なイベントを行っています。

発足以来13年が経過し、現在では会員数も260人になりました。初心を胸に、市民の皆様の一層のご支援と協力を戴き、さらに多彩な活動を充実し、川を守り、水を活かしたまちづくりを進めていきたいと考えています。

会は「できる人が、できる時に、できることを」を基本に、参加するすべての人々によって活動が支えられています。

人々の善意による活動の輪と和をさらに広げていきたいと思います。
一人の百歩より百人の一步を！

(「特定非営利活動法人 新町川を守る会」HPより)